◎私の座右銘◎

凡

詩人 菊田守

きくた・まもる――昭和10年東京生まれ。明治大学１年の時に安西冬衛の短詩「春」に出逢い、詩を書き始める。34年大学卒業後、地元協立信用金庫（現・西武信用金庫）に入社。営業係となり、北野支店長、鷺宮支店長、本店長などを務める。59年日本現代詩人会理事となり、その後、日本現代詩人会会長などを歴任。詩集『かなかな』により第１回丸山薫賞を授賞。平成29年「先達詩人の顕彰」に選出される。

ひらひらと飛ぶ蝶の姿に青春の縮図を見た

私は昭和十年、東京都中野区鷺宮に生まれました。以来八十二年、ずっと同じ場所に住んでいます。昭和二十年三月の東京大空襲も経験しましたし、小学校、中学校、高校は全部歩いて通いました。当時の鷺宮はとても豊かな田園地帯で、とにかく自然が素晴らしかった。私は近くの雑木林や妙正寺川でよく遊んだものです。

後に詩人の村野四郎さんから、「誰に何と言われようと小動物の詩を書き続けなさいよ」と言われ、幼少時代に遊んでいた昆虫や魚、小鳥たちを詩で表現するようになったのも、鷺宮の恵まれた田園地帯の環境によるところが大きいのだと思います。

私が詩というものに触れ、初めて感動したのは明治大学一年生の時でした。御茶ノ水駅近くの本屋で、詩人の北川冬彦さんの『現代詩Ｉ』をぱらぱら捲っていると、その中に収められた安西冬衛さんの短詩「春」がパッと眼に飛び込んできたのです。

てふてふが一匹韃靼海峡を渡っていった

私は、この一見頼りなげに韃靼海峡をひらひらと飛ぶ蝶の姿に自己を見、また、悩みや苦しみの多い青春の縮図を見たのでした。

それをきっかけに詩を書き始めた私は、北川さん監修の「現代詩入門」に投稿を続け、一年目に自作の『首』が「現代詩入門」コンクール第一回の第五席に選ばれたことで、北川さんの詩誌『時間』の同人となりました。

毎月『時間』を隅から隅まで読み、コメントをつけて熱心に研究会に通い、「菊田さん、『時間』を郵便局に届けてください」と言われれば、両手いっぱいに雑誌を抱えて郵便局まで届けに行くなどしながら、少しずつ北川さんと親しくなっていきました。そして、大学四年の時に『時間』新人賞をいただくことができました。

日常のあらゆる体験が詩の源泉になる

昭和三十四年、私は大学卒業と同時に『時間』同人から離れ、東京・中野の信用金庫に営業担当として入社。その翌年、知人の詩人の紹介により、詩集『亡羊記』で第十一回読売文学賞を受賞した村野四郎さんのもとに通うようになりました。二十五歳の時です。

当時の詩壇では、村野さんは大変厳しいという評判で、皆恐れ多くて容易に近づくことができませんでした。後に私が詩集を出した時も、詩評の冒頭で「若さがあっていい」と褒められたかと思うと、最後には「でも中には脂下がっている（いい気になっている）ものがある」と、厳しい批評がばっちりと添えられていました。近寄り難い方でしたが、私は果敢にその懐に飛び込んで行き、村野さんが亡くなるまで二十年近くお付き合いさせていただきました。

村野さんが常々おっしゃっていたのは、「詩人は職業を持っていなければいけないよ」ということでした。私が初めて村野さんとお目に掛かった時も、「あなたは、どこかに勤めていますか？」と、尋ねられました。そのこともあって、私は平成四年に退職するまで三十五年間、信用金庫で働きながら詩を書き続けました。

やはり、営業担当として集金に行ったこと、お客様との出逢いや苦労など、あらゆる実生活の体験が、いま詩を書く上での基礎になっていることを実感しています。

また、私が詩を書く上で大切にしてきたのは、「イメージが目に見えるように書く」ということです。例えば、三十五歳の時に書いた『蛙の姿勢』という詩があります。

両手をついて
おとなしくしているが
油断は禁物！
次の瞬間
とびかかるかもしれぬ
逃げ出すかもしれぬ姿勢である

目の前に両足をついてじっと動かない蛙がいる。次の瞬間には跳び掛かるかも、逃げ出すかも分からない――。私たち人間もその蛙と同じように、絶えずあっちに行こうか、こっちに行こうかという、二者択一の中に生きています。つまり『蛙の姿勢』では、人間がいま生きているということ、いわば人間の「実存」を蛙の姿に喩えて表現したのです。

詩人は謙虚であることが大事

その後も、土橋治重さん、伊藤桂一さんなど、素晴らしい師に恵まれましたが、私が一番教えられたことは、詩人は一庶民として生活し、上から目線ではなく、目線を低くして物事を見ていくこと。そして芸術生活においても、実生活においても、人として謙虚でなければよい詩は書けないということです。皆に恐れられていた村野さんも、決して偉ぶることなく、若い私を快くご自宅に招いてくださり、惜しみなく指導してくださいました。

だから私は若い頃から、「ごく当たり前であること」を意味する「平凡」の「凡」の字を大事にして詩に向き合ってきました。八十二歳になるいまもなお、町内会の班長をお引き受けするなどして、ごく普通の生活、何かしらの仕事をしながら詩を書いています。

今年六月、私は日本現代詩人会より、過去に室生犀星や堀口大学、佐藤春夫、草野心平なども選ばれた、「先達詩人」として顕彰していただきました。現代詩の発展に貢献したことを高く評価していただいたのです。

少年時代の思い出、会社や町内会などあらゆる実生活の経験が、きっと私の詩の中で血となり、眼差しとなって人の心に語り掛けているものと信じ、これからも詩という終わりなき道を歩み続けていきたいと思います。